

東京 2020 オリンピックレスリング競技選手用会場救護と

当院のスポーツ整形外科外来について

整形外科 田中 哲平



みなさんこんにちは、2017年10月より当院整形外科に赴任しました田中哲平と申します。専門はスポーツ整形外科・膝・足関節外科です。

今回は東京オリンピックレスリング競技の選手用会場救護副責任者を努めさせていただきましたので、オリンピックの裏側での医療・救護体制と日本選手の活躍についてお話しさせていただきます。オリンピックに携わる医療従事者は大きく3つに分かれます。1つ目は各国代表に帯同している医師・トレーナーです。自国の選手の治療・ケアなどを行うためにそれぞれの国から選出されています。2つ目は選手村内にあるポリクリニックと呼ばれる医療機関での医療従事者です。ポリクリニックは練習会場・競技場などで怪我をした選手・スタッフが選手村へ戻った際に24時間受診できる病院でMRIやCTも備えています。リハビリ・マッサージ・歯科治療・マウスピース作成など幅広い医療が提供されました。3つ目が各競技会場の医療スタッフです。無観客となりましたが観客用救護と選手用救護の2つに分かれています。

レスリング競技は幕張メッセで8日間に渡り開催されました。選手用医療は医師13名、歯科医師4名、看護師3名、トレーナー17名でシフトを組み救護に当たりました。我々の役割はマット上で選手が怪我をした際に安全に救急搬送を行うことと、救護室に来た選手の医療サポートで対象は全員がオリンピック選手です。また、レスリング競技の救護は素早く救護に行けるようにマット直下に待機していました。救護訓練は3年前の国内大会から開始し、当日は1日4回以上合間を縫って行なっていました。試合中に左肩を脱臼し立ち上がれなくなった選手がいて搬送の準備を行いましたが、幸い脱臼はすぐに整復され実際に救急搬送するような大きな怪我は起きずに大会が終わりました。

日本選手は12名が出場し、金メダルが須崎選手・向田選手・川井梨紗子選手・川井友香子選手・乙黒拓斗選手・銀メダルが文田選手・銅メダルが屋比久選手と活躍し、高橋選手・乙黒圭祐選手・高谷選手・土性選手・皆川選手も頑張ってくれました。パリオリンピックに向けてこれからも頑張ってもらいたいものです。

当院のスポーツ整形外科診療は田代部長（火・金曜）と田中（隔週水曜・木曜）で行なっています。プロ選手からレクリエーションレベルまで幅広く診療していますので、スポーツでの悩み、膝の痛みなどお気軽にご相談ください。

